

編集を終わって

監修者 北原 進

地方史は、その地方の歴史的な道筋を、その地方の人びとの発想で語り、外からの批評を得ながら次の世代に送り渡してゆくものである。福生地方史は、市民とその前の世代の人びとがたどってきた過去を、福生市民の立場で語らねばならぬ。しかも独りよがりとならぬために、外部の人びとの読むに耐え、しかも現代の福生市民により、読み継ぎ語り継いで次の世代に受け渡していく、深みのあるものでありたい。

自治体編纂の歴史書は、それがお故郷こくに自慢の郷土史にとどまらぬように、日本史一般に通用する学問的水準が要求される。この通念に対して私は批判的であるが、自治体史も学術書として統計と資料引用が多く、難解で分厚なものとなるのが一般である。これに対し多くの自治体では、市民版とよぶ小冊をつくることが多い。すでに市民のための本編（とよぶ）のほうは、市民用と別物という矛盾を感じるが、現状からすると別冊の市民版も十分意義がある。市民版は本編の水準と成果によるといっても、学術書である必要はない。学界に問題提起するのではなく、市民の知的関心に応えるのが最大の目的の第一である。

われわれはすでに、『福生市史』二巻と『福生市史資料編』を刊行してきたが、それは市制二十周年

をはさんだ事業として行われた。自然環境を含め、時代・分野ごとに内外の専門研究者をそろえて、資料に基づく実証的な叙述をするように努めた。編纂の過程で、研究の進展を研究会や『福生市史研究』誌に発表して蓄積し、また資料類を積極的に収集して、その一部は『資料編』として公刊した。それは市史の叙述の根拠を示すとともに、今後とも不断に継続するであろう市域の研究を支援し、さらに将来あらためて企画される市史の再編集の際、心配される資料の残存状況にも備えるためでもある。

われわれの『市史』および『資料編』も大部であり、市民の家庭の書架にそろえておくには不向きであった。福生市史編纂委員会および専門委員会は、発足当初からいわゆる市民版または家庭版の作成を企図し、市史編纂の一環にこれを組み込んでいたが、残念ながら下巻の刊行をもって編纂事業はいったん終了し、後日を期して、窓口を福生市教育委員会に引き継いだのである。

市民のだれもが手軽に読める教養書としての市史の作成を望む声は、編纂事業が終了しても、『市史』に関する学習会合が継続して進むに従い、根強く続いた。そしてついにその実現方を、教育委員会が担当することとなったのである。前述のごとく市民版の市史は、市民の知的要求に応えうることが根幹である。

『市史』の刊行より年を空けているために、編集方針を新たに考慮することとし、適当なページ数、理解しやすい表現、写真・挿絵などビジュアルな要素の増加といった点に留意した。また日本史、とくには世界史のごく重要な事項と連係をとることも、福生市の歴史的普遍性を考えるうえで重要であ

る。

さらに一般の読書人が「読み切る」ことのできる量の本には、一貫した叙述が必要である。『市史』では分担執筆者の個性的表現を尊重する必要があったが、それを参照して執筆された原稿を、監修者が通読して語調を一貫させて書き直させ、それをさらに修正し、また書き直すという作業を何度も要求して、それらのすべてを通させていただいた。この間の委細にわたり、事務局担当者の大変な忍耐と協力には感謝するほかない。

また、写真などの資料を入れ込むことも苦労であった。『市史』編纂過程においても、写真・絵画等の資料は集まりにくく、ついに図録資料集といったものではできなかった。本書は図録編ではないが、理解を深めるのに必要な程度の絵図を捜すことにもむずかしさを覚えた。

かくて『福生歴史物語』は完成した。歴史の発想の原点を福生に置き、市民と父祖たちの歴史の歩みを正しく叙述できているか、内心赤面せざるをえない。

まもなく二十一世紀の幕開けを迎える。本編の『福生市史』は市制二十周年を記念して、福生市民の歴史を跡づけた。本書もまた歴史の歩みを振り返っているが、それは今日から明日へ飛躍する、福生市の滑走路を整える作業の一つとして編纂したものであることをご理解いただきたい。そして、一人でも多くの次世代を担う市民の方に読んでいただけることを期待したい。